

DP 対応調査から見た一貫教育・連携教育概論の成果

幼児教育講座・深田昭三

1. 分析対象とした授業の特徴

(1) 授業の概要

本報告では対象科目として，今年度（2018年度）より新たに開講された「一貫教育・連携教育概論」を取り上げた。

この授業は，学校教育における一貫教育・連携教育の意義を学び，教育実践の課題や問題点を考察することを目的とした授業であり，次の4つを到達目標として掲げた。

1. 一貫教育・連携教育の意義とその背景について理解し視野を広める。
2. 異なった学校種における発達に応じた幼児・児童・生徒とのかかわり方の必要性を認識し，対応の素養を身につける。
3. 小・中・高等学校の指導要領，教科内容の

接続について理解する。

4. 一貫教育・連携教育における実践上の自己課題と立場や方法について省察し，教員免許取得の動機づけや自己課題を説明できる。

全15回の授業内容は，表1のとおりであった。授業の前半では，「子どもの成長段階に応じた学校種間の連携(幼一小，小一中など)」について，実践事例を踏まえて学ぶ。授業後半では，各教科領域の教科内容における学校間接続とカリキュラムマネジメントについて学ぶ。最後に，生きる力や社会性の育成，あるいはキャリア教育とも関わる特別活動・総合的な学習の時間という視点からも考察する。

この授業は，教育学部3回生対象の共通必修科目である。初年度であったため，2017年度の受講者はすべて3回生であり，171人が受講した。授業形態はオムニバスであり，各回1人または2人の教員が担当し，合計19人の教員が講義を担当した。

表1. 各回の授業内容

回	授業内容
1	授業のオリエンテーション:目的・教員養成における位置づけと授業方法について
2	一貫教育・連携教育推進の背景と制度的変遷について:6・3・3制の見直しや小中一貫教育の推進の背景など
3	子どもの成長段階に応じた学校種間の連携と課題:幼小連携・接続
4	子どもの成長段階に応じた学校種間の連携と課題:小中一貫・連携
5	学校間接続における学習支援・適応支援のあり方
6	特別支援教育から見た一貫・連携教育の意義と課題
7	言語・社会系教科における異校種間での接続とカリキュラムマネジメント 1
8	言語・社会系教科における異校種間での接続とカリキュラムマネジメント 2
9	自然科学系教科における異校種間での接続とカリキュラムマネジメント 1
10	自然科学系教科における異校種間での接続とカリキュラムマネジメント 2
11	芸術系教科における異校種間での接続とカリキュラムマネジメント
12	生活健康系教科における異校種間での接続とカリキュラムマネジメント
13	特別活動から見た一貫・連携教育
14	総合的な学習の時間から見た一貫・連携教育
15	まとめと全体の討論，試験

(2) 出席管理

本授業は，多数の教員が担当するオムニバス形式の授業であること，また全員必修で受講者数が多いことから，出席管理が大きな問題となった。

そのため，本授業では Microsoft フォームでの出席登録を用いた。具体的には，受講者は授業担当者から示されたキーワードをスマートフォンから打ち込むことで出席を登録する形式を採用した。なお，スマートフォンを持っていない学生については，別途出席票を配布し，回収した。

2. DP 対応調査の結果

(1) DP との対応

教育学部の掲げる4つのDP(DPの定義は表2を参照)に対して，本授業がどの程度対応していたかをDP対応調査において質問した結果，次ページの図1の通りとなった。

表 2. 本授業で評価対象とした DP

DP1	知識・理解 :教育と教職に関する確かな知識と、得意とする分野の専門的知識を修得している。
DP2	技能 :教育活動に取り組むための十分な技能を身につけている。
DP3	思考・判断・表現 :教育現場で生じているさまざまな現代的諸課題について、専門的な知見をもとに、その対応方策を理論に基づいて総合的に考え、その過程や結果を適切に表現することができる。
DP4	興味・関心・意欲、態度 :教師としての使命感や責任感を持ち、自己の課題を明確にして理論と実践とを結びつけた主体的な学習ができ、自主的に社会に貢献しようとする。

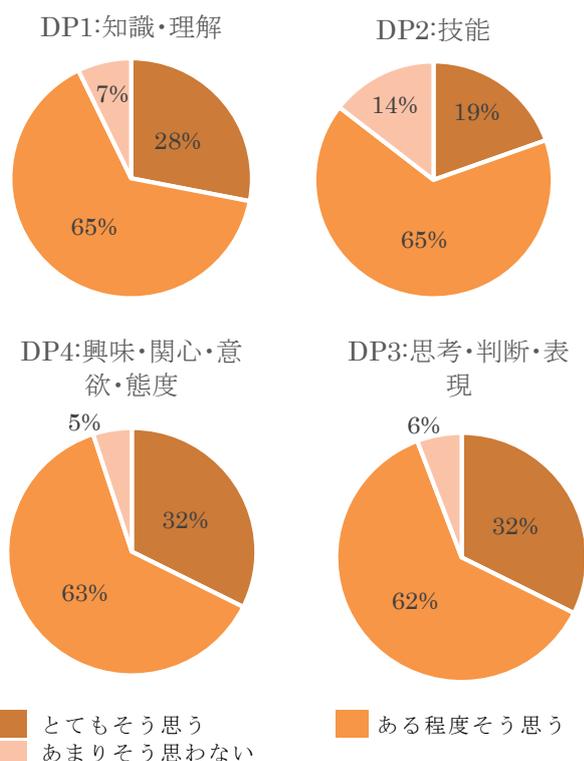


図 1. 授業内容の DP への対応 (n=139)

本授業が初年度の授業であり、またオムニバスの授業であったものの、DP1 から DP4 への対応について、学生からの肯定率はそれぞれ 92.8%, 84.9%, 94.2%, 95.0%と、きわめて高かった。

とりわけ本授業のシラバスにおいてねらいとしていた DP3 (思考・判断・表現) や、DP4 (興味・関心・意欲・態度) において、ほぼ 1/3 の受講生が「とてもそう思う」と答えていたことから、本授業のねらいがかなり達成されたものと言ってよいのではないかと。

(2) 授業外学習時間

本授業での授業外学習時間についての 4 つの質問における結果は、表 3 に示した。

課題や予習・復習などの授業外学習の時間についての質問「この授業で出された課題や予習・復習のために、授業時間外に費やした学習時間は平均で一週間に何時間程度ですか。」に対しては、平均 0.66 時間との回答であったが、全く学習を行っていない層 (38%) と、1 時間以上の学習を行っている層 (45%) に二分化されていたことがうかがえる。

一方、課題等ではなく、自発的に行った授業に関連した授業外学習についての質問「この授業で出された課題や予習・復習をおこなうこと以外の理由で、この授業に関連して時間外に費やした学習時間は平均で一週間に何時間程度ですか。」に対しても平均 0.56 時間との回答であったものの、これについては約 69% の学生が全く学習を行っていなかった。

課題等と課題等以外の授業外学習時間の合計を求めたところ、平均 1.22 時間の学習であった。とりわけ、合計 2 時間以上の学習を行っている学生は 24% であり、全体の 1/4 は熱心に学習を進めていたと言えよう。

しかし授業外学習時間の合計でも全く学習を行っていない層が 37% いた。このことは授業の課題に時間を費やさない学生は、課題外の学習も行わないことを示しており、このような学生層にどのように働きかけていくのかが、今後の検討課題となる。

なお、「この授業を受けて、自分で自発的に読んだ本や論文の数はいくつですか。」という質問に対しては平均 0.27 件、「この授業をきっかけにして取り組んだ、教育実践や授業時間外での制作等の自発的活動は何件ありますか。」という質問に対しては平均 0.09 件という回答であり、いずれも高い数値とは言え

表 3. 授業外学習時間 (n=139)

	課題等	課題等以外	合計
0 時間	38%	69%	37%
0.5 時間	17%	8%	9%
1 時間	38%	19%	30%
2 時間	5%	2%	19%
3 時間以上	2%	2%	5%
平均	0.66 時間	0.56 時間	1.22 時間

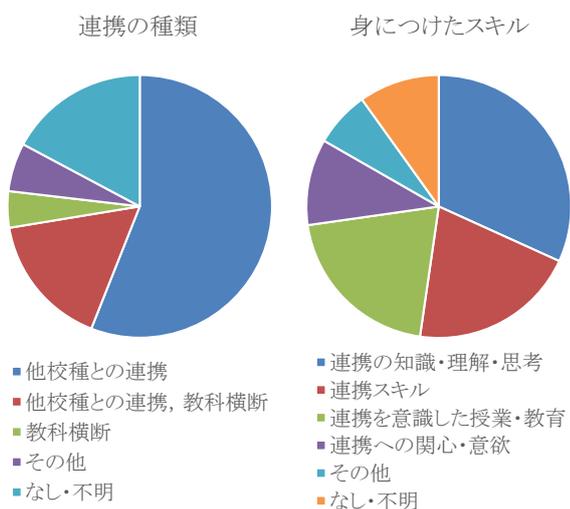


図 2. 授業で身につけたスキル (n=134)

なかった。

(3) 授業で身につけたスキル

「この授業を通して、教員になる上で、どのようなスキルが身につくと思いますか。」という質問で、自由記述による回答を求めた。

得られた記述を「連携の種類」と「身につけたスキル」の2つの点から、それぞれ3カテゴリーとその他、4カテゴリーとその他に分類したところ、図2のような結果が得られた。

主として他校種との連携におけるスキルが得られたとする回答が合計72%と多く、教科横断についての言及は比較的少なかったものの合計20%の学生が教科横断での連携にも言及していた。

身につけたスキルでは、「連携の知識・理解・思考」の面への言及が最も多かった(31%)。具体的には、「他校種との連携の実践例に関する知識」など連携例の知識や「幼小中高の連携を考える力」などの思考面などについての回答があった。

「連携スキル」については、20%の受講生からの言及があり、「小学校とか各教科という枠にとらわれず、全体を広く捉えて、カリキュラムを組み立てていくスキル」や「学校間の子どもの様子、受け渡しがスムーズになると思う」などの回答があった。

「連携を意識した授業・教育」については、やはり20%の受講生から言及があり、「子どもたちが学年や学校によるギャップを感じないような授業実践をするスキル。」や「一貫、

連携を意識した授業づくりをすることができると思う。」などの回答があった。

以上のことから、学校教育における一貫教育・連携教育の意義を学び、教育実践の課題や問題点を考察するという本授業の目的は、おおむね達成できたと言ってよいのではないだろうか。

ただし、ごく少数ながら「オムニバスが多くなってしまい、各講義の内容があまり深められなかったのではないか。」や、「先生方のやらされてる感がして、何が言いたいかわからずどのようなスキルが身につくのか分からなかった。」といった意見もあった。これらの意見も含め、今年度の成果を整理し、次年度以降の授業設計に活かしていきたい。

3. 地域社会を核とした教育と研究のつながりについて

本授業では、学校種間の連携が主たる授業目的であったため、学校と地域社会との連携や、教育・研究のつながりについて、特定の目標を設定して授業設計をしたわけではない。

ただ、地域の教育界とのつながりの深い教員が多数この授業を担当していたことから、各授業においては愛媛県を始めとする、地域での連携事例を豊富に引きながら授業展開がなされた。

そのため、少数意見ではあるものの、「異なる学校種や保護者との連携にとどまらず、地域と連携することの大切さやその方法について学びになった」という意見も得られた。

4. 終わりに

一貫教育・連携教育概論は、幼小、小中などの学校種間の連携、あるいは教科等との連携を重視する本学部の特徴を、授業科目として学ぶことを目指す、他大学にはあまり見られない先駆的な授業である。

初年度ということもあり本授業の実施については多くの困難があったものの、今回の分析で示されたように、少なくともDPの達成の面からはおおむねその使命が果たせたと言ってよいのではないかと。

私はチーフとして、2回の授業担当のほか、全体の授業の運営にもあたったが、本成果が挙げられた背景には、授業提供をしてくださった多くの先生方のご尽力があった。終わりに多忙の中授業担当をしてくださった先生方への感謝の意を述べたい。